



『武家不断枕』と『播磨梶原』 - 都の錦の赤穂義士 伝実録小考 -

著者	山本 卓
雑誌名	國文學
巻	97
ページ	53-63
発行年	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/9214

『武家不断枕』と『播磨相原』

— 都の錦の赤穂義士伝実録小考 —

—

都の錦は、西鶴以降の浮世草子作者として「逸することは出来ぬ」（野間光辰氏）存在である。浮世草子の作者としては既に諸氏によりさまざまな評価がなされているが、実は都の錦の真骨頂は、舌耕者としてあるいは実録写本の作者として、「忠臣蔵」赤穂義士伝の形成に多大なる足跡を残したことであった（拙著『舌耕・書本・出版と近世小説』平成二十二年、清文堂出版）。都の錦作の赤穂義士伝実録の嚆矢とされるのは、現在知られている諸本の範囲では、この度、丹羽謙治氏「発見の宝永三年都の錦序『武家不断枕』三卷合一冊（後藤正兵衛写）」である。本作はカタカナ本の実録写本である。詳しくは同氏「翻刻」鹿児島県立図書館蔵『武家不断枕』—都の錦の初期赤穂義士伝実

山本 卓

録—（『国語国文薩摩路』第五十六号、平成二十四年三月）に譲るが、この書を「童女の為に文義通じがたければ今亦平話を以て三卷に略し」たのが宝永四年成『播磨相原』（都の錦）である。その伝本としては、東北大学狩野文庫本（幕末の転写本。原本の成立は宝永五年六月十日から二十四日）、関塚磨氏旧蔵本（現在鹿児島県枕崎市立図書館寄託。都の錦自筆本の模写本。原本五・六年と推定）、静嘉堂文庫本（都の錦自筆本の模写本。原本の成立は宝永六年五月十日から二十五日）が知られていたが、この度、新たに宝永八年都の錦自筆本を大阪で見出した。

新出本の詳細や『播磨相原』諸本間の問題は、別に用意しているこの書の翻刻の解題（高橋圭一・山本卓編『近世実録翻刻集』所収。平成二十五年二月）に譲り、本稿では『播磨相原』とは『武家不断枕』をどのように「略し」たものであるのかに

ついで述べたい。

二

相違点の第一は「武家不断枕」の本文がカタカナであるのに対し、「播磨相原」ではひらがなにされていることである。ただし、「武家不断枕」のカタカナ本文のすべてをそのまま直訳的にひらがなに翻したというわけではない。その具体相を窺っていくこととする。まず全体の構成を窺うため章立てを対比する。

武家不断枕	播磨相原	共通度			
		狩枕	静	大	
浅野長矩於殿中一意趣討事	欲は非業の媒 哀れに消る浅野の露	○	○	○	○
浅野大学 <small>五分地被</small> 「仰付」 内匠頭死骸送事	思ひの外にぬる、は袖	○	○	○	○
問喜兵衛、妻自害 友迎久光女房之事	一日の恩に乳母が命	○	○	○	○
多川月岡江戸使 赤穂城騒動ノ事	鐘が降ても動かぬ大石	×	×	×	×
大石異見 義士盟約ノ事	識に指の血心中の闇	○	○	○	○
赤穂城渡		△	△	△	△

家中離散ノ事	良雄偽不行跡	赤穂牢人易容事	大石父子、小野寺十内江戸ニ下ル事	堀部氏夢想	義士泉岳寺参詣之事	義士夜討	上野介最後ノ事	上野介首領「墳墓」	上野介預ケニ成事	上野介首送	落世ノ事	四十六人切腹	各辞世歌ノ事
	三味に引る、都の風俗	名を捨て徳をとる世界	都の名残時雨の涙五十三次	夢におどろく暁の雪	自然とめぐる因果の車	今は命をおしむ物置の恥						(万代に残る武勇の名)	
	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×
	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×	×

章立てにおいては、概ね対応しているが、詳しく見るとそう簡単ではない。「播磨相原」は「武家不断枕」に依りながらも原本に必ずしも拘泥していないのである。両者の内容における関係を明らかにするため共通度を○とした冒頭箇所を一例として見てみよう。梗概（一部原文）を示すと、

「死生有命、富貴在天」
ではじまる枕に続き、元禄十四年三月、浅野長矩が公卿御馳走の役を命ぜられる前後が述べられる。

吉良上野介に賂をすべきにもかかわらず、浅野の性癖から賂賂などの媚びることをしなかつた。ために吉良と浅野の両氏の間は睦ましくなかつた。

吉良は浅野に恥辱を与えて意霧を散ぜようとし、ある時は浅野からの問い合わせを無視して、その後も一切の情報を与えなかつた。その後、伝奏屋敷での場面

「憎や世に貧者とだにいへば曾我殿に例ふ」ではじまる枕に続き、浅野長矩が勅使の御馳走役を仰付けられる前後を述べる。

吉良上野介に賂をすべきにもかかわらず、浅野の性癖から音使などの媚^へることをしなかつた。ために吉良と浅野は睦ましくなかつた。

吉良は浅野を辱めようと思ひ、浅野からの問い合わせには居留守を使い、その後も一切の情報を与えなかつた。そして、伝奏屋敷での場面にて吉良は列座の人々の面前で浅野の御馳走

にて吉良は、大勢の面前で、浅野のやりようが万端疎略だと罵つた。

式当日は御馳走人は束帯であるべきところ、浅野は指貫に直垂で伺候していた。吉良は大目付衆などの面前で浅野の贅応が総じて兎相であると糺弾した。恨み骨髓に透つた浅野は小太刀で吉良に切り付けた。二の太刀に及ぶも致命傷には至らず二の丸の留主居梶川与三兵衛に組み留められる。浅野は休息部屋へ押し込められ、血汚れなどを改め、式は遂行された。浅野は田村右京太夫へ預けられ、吉良はお構いなし。

の体が兎相だと罵つた。

式当日は御馳走人は束帯であるべきところ浅野は指貫に直垂で伺候していた。吉良は老中以下の面前で浅野の御馳走の風情が兎相であると糺弾した。浅野は恨みで堪忍なりがたく「日比の意趣覚へつらん」と言葉を発し小刀で吉良に切り付けた。二の太刀に及ぶも致命傷には至らず二の丸の留主居梶川与三兵衛に組み留められる。浅野は休息部屋へ押し込められ、血糺などを改め、式は遂行された。浅野は田村右京太夫へ預けられ、吉良はお構いなし。哀れに消る浅野の露

晩景、浅野が預けられて
いる田村邸に大目付庄田下
総守以下が派遣され、浅野
に切腹を命ず。浅野は遺言
を庄田に託す。

サラテタニ暮行春ノ散
ガテナル花ノ色、返照
ノ鐘に誘来ツテ匂イモ
イト、ナツカシク、霞
タナヒク気幸迄モ最艶
ナル黄昏ニ空ノ名残モ
今ヲ限リト思ハレ、年
頃和歌ノ浦波ニ思ヒヲ
音テ、筑葉山ニ心ヲハ
コビ、優ニヤサシキ意
モアリケレバ、辞世ニ、
風ニウキ花ヨリモ又
我ハ猶春ノ名残を何
ニトカセン

晩景、浅野が預けられて
いる田村邸に大目付庄田下
総守以下が派遣され、浅野
に切腹を命ず。(浅野は遺言
を庄田に託す)、

さらぬだにくれゆく春
のちりがてなる花の
色、入相のかねにさそ
ひ来りて、匂ひもい
とゝなつかしく、かす
みたなびくけしきまで
もいと艶なるたそかれ
に、かくて時刻うつり
ぬと検使の人くしき
りに最期をいそぐもよ
ふしの声、雲ぬにかよ
ふ心ちして空の名残も
今をかぎりと思はれ、
長矩日ごろ式嶋の道に

斯テ時移リテ酉ノ下剋
書院ノ広庭ニ台ッモフ
ケテ、畳ヲ重ネ、其上
ニ緋氍ヲ敷、内匠頭座
ニ著テ後、三方ニ扇子
ヲ添テ出ス(大体切腹
人ニ刀ヲ不出ノ作法
也。但シ事ニ可依ル)。
介錯ハ御徒目附磯村武
太夫ナリ。内匠頭、何
ナル所存ニヤ、自身ノ
指料ニテ介錯アラレ度
願ナリ。依レ之、望ニ
任セ用レ之、長矩肌ヲ
解、扇ニ手ヲ掛ルト否、
首ハ前ニ落ヌ。嗚呼、留
得ヌ無常ノ殺鬼□□己
身ヲ襲来テ、行年諱三
十二、甲斐ナキ名ノミ

心をかけて浅香山の浅
からぬ志し優にやさし
かりければ、辞世によ
める。

風さそふ花よりも又
われは猶春のなごり
をいかにとかせん
すでに時うつりて酉の
下剋、書院の庭に台を
もふけ畳をかさね、其
上に毛氍を敷、内匠頭
座をもふけ給へば、三
方ニ扇をそへて出す。
御徒目付磯村武太夫介
錯をうけ給はり、長矩
扇に手をかけ申スとい
なやそのま、首を打を
とす。やがて首を右の
三方にのせて大目付の

曙^{トキ}ノ春ノ夢トソ消ニケル。ハカナカリシ最後也。ヤカテ疊紙ニ首ヲウケ、右ノ三方ニ載テ大目附ノ実檢ニ入ル。死骸ヲハ白小袖ニ包、大広蓋ニ載、首トトモニ右京太夫カ家来ニ持セ、磯村武太夫相添、玄関工搔出ス。死骸は弟淺野大学に引き取らせる。天和年中に稲葉侍従が殿中で堀田少将を刺殺したことがあつたが、殿中で刃傷沙汰を起こせば、殺されるといふ前例である。前車の覆るのを見て、後車の誠めとすべきである。

実檢に（ ）る。死骸をば大広蓋^{ひろがた}にのせ、首とともに右京太夫の家来にもたせ玄関へかき出す。

死骸は弟大学に引き取らせる。

原文を對比した部分から分かるように、「播磨相原」は省略部分などはあるものの、概ねカタカナ本「武家不断枕」に沿ってひらがな化されている（辞世の件は後述する）。しかし、梗概を示した冒頭の枕（導入部）から全く別文である。「武家不断枕」は「死生有^レ命、富貴在^レ天、官位俸祿無^レ隨身諸従不同命、天二時アリ、地ニ財アリ、能人ト是ヲ共ニスルモノハ仁ナリ、仁ノ在所天下帰^レ之、人ノ死ヲ救シ、人ノ難ヲ解キ、人ノ憂ヲ救ヒ、人ノ急ヲ救フハ徳ナリ、徳ノ在所天下帰^レ之、与^レ人憂ヲ同シ、楽ヲ同シ、好ヲ同シ、悪ヲ同フスル者ハ義也、義ノ在所天下赴^レ之、凡人死悪^ニテ生ヲ楽ム、徳ヲ好^ニンテ利ニ帰ス、生ヲ能シ利ヲ能スル者ハ道ナリ、道ノ在所天下帰^レ之、于^レ越明君則道体^ニ天給ヘハ四海帰^ニ一元、万民樂^ニ四時、常ニ堂々ノ化ニ誇テ長ニ巍々タル徳ヲ仰^ク、干戈ハ饒^ニニ納リテ八洲ニ伝フ」となっている。「死生有^レ命、富貴在^レ天」と論語（顔淵）ではじまり、以下、天地・仁・徳・義・生死・道・天下を論じる大議論の導入部である。これに対し「播磨相原」は「憎や世に貧者とだにいへば曾我殿に例ふ。しかあれど人は美目より心とかや。其曾我兄弟が心中後の人の及ぶ所にあらじ。そも富貴にして鉅万の財を積とも埋れぬ名を長き世に残さまほしきを、五百年余り此かた錢を以、富士にくらぶる者はいくたりも有^レべけれど、

いまだ富をすて、義を立る人を聞ず。あ、夢の外の算用か更にうつ、とも思はれぬお侍の目覚し、語れば口に津を生じ、きけば心のみあらかに、月もあかしの播磨がた赤穂の城主五万三千石蔵に一墜の塵となりし(由緒を)そつと尋るに、…と曾我兄弟を例に、富貴と名(声)を対比して具体的に述べる。「略し」たとはこれほどに大胆なところもある。

本筋についても、刃傷事件時に浅野が吉良に対して発する「日比の意趣覚へつらん」との台詞は「播磨楳原」にしかない。逆に、浅野の願いにより介錯を自身の指料で行われたこと、天和年中の稲葉正休による大老堀田正俊に対する殿中刃傷の先例などは「武家不断枕」にしかない。

そして何よりの相違点は浅野の辞世である。一首の初句が「風ニウキ」(「武家不断枕」)・「風さそふ」(「播磨楳原」)と異なるのである。「風さそふ花よりも又われは猶春のなごりをいかにとかせん」は「播磨楳原」だけでなく、都の錦の赤穂義士伝実録に共通するものであり、「赤穂精義内侍所」(四十卷二十冊など)巻冊不定・中村幸彦氏によると明和七年序)などの都の錦以降の作者の手になる義士伝実録にも広く踏襲されるのである。一方、史実として浅野の切腹に立ち会った切腹検使副使の多門伝八郎の記述とされる史料「多門伝八郎筆記」には「風さそふ花

よりもなをわれは又春の名残をいかにとかせむ」(日本思想大系「近世武家思想」と小異するものの記載を見る。当時の確実な史実をあらわす文書類には、浅野の辞世そのものの記録がないばかりか辞世を詠んだ事実さえ記載を見ない。史料の中では「多門伝八郎筆記」のみの単独情報なのである。史料とされる「多門伝八郎筆記」であるが、はたして全幅の信頼を以て読んでよいのだろうか。多門の記述に虚構性の指摘はある。野口武彦氏は「多門伝八郎筆記」の記述それ自身が、史料として扱うには疑惑の度合が多すぎるという方向に進んでゆくのだ。ありていにおいて、同書は、せっかくの客観的事実を伝えていながらそれを破算にしてしまう壮大なホラバナシである。」「多門伝八郎筆記」がいつ書かれたかの正確な時期はわからない。おそらく赤穂浪士の吉良邸討入りが成功した後のことであろう。多門が刃傷事件の当日から内匠頭びいきであったことは間違いない。それはまた幕府旗本の多くの心情でもあったのである。それが討入り成功のためにどんどん増幅してゆき、自分がいかに最初から浅野内匠頭に同情し、肩入れしていたかという自己劇化、自己説話化が甚だしいのである。」「(忠臣蔵―赤穂事件・史実の肉声)・一九九四・筑摩書房)とされる。多門の実体験でないとするれば、討入り成功後、この筆記を記した多門が世に広まって

いた浅野の辞世の一首と称されていたものを取り込んで記述したものとことだろうか。それならもう一步踏み込んで、浅野の辞世は、実録作者の創作とは考えられないだろうか。『武家不断枕』の「風ニウキ」という初句は他に例が知られていないのである。当時、類似のものが浅野の辞世と称して口承あるいは書承で流布していたのかも知れないが、とにかく今日まで伝存するのは今のところ都の錦一人である。「風ニウキ…」の辞世は都の錦の作としてよいだろう。それを都の錦自身が「播磨磨原」以降に「風さそふ」と添削推敲したことになるのではない。丹羽氏による「武家不断枕」の発見により、「風さそふ…」という広く知られる浅野内匠頭辞世の実作者として、義士伝実録作者であり、舌耕者である都の錦を、その候補に挙げることは許されよう。

なお、先述のように「多門伝八郎筆記」では二句目・三句目は都の錦の「花よりも又われは猶」と微妙に相違する。「又」と「猶」が逆転しているが、この程度の小異は伝播の過程で変形するものとしてよいのではないか。この辞世が口承あるいは書承で伝播する過程で、あるいは「多門伝八郎筆記」作者がこれを取り入れる過程で変形したのであろう。

話は戻るが、表で共通度○とした冒頭部でも、これほどの差

異があることには注意しなければならない。

三

さらに特徴的な章を取り上げたい。「武家不断枕」巻中「良雄偽不行跡」では次の様である。

大石内蔵助良雄、智謀ハ南木ノ家訓ヲ伝へ、計略ハ甲陽ノ勇鑑ニ哲シ、元來思慮深者ナレハ、態ト自懦者ノ真似ヲナシ、表ニハ不行義ノヨウニモテナシ、酒宴遊興ニ身ヲ委ネ、親類縁者ニ疎々敷、万法外ニシテ亡君ヲ慕旧恩ヲ思ヒ、忠義ヲ励ス志ナトトハ存シヨラサル気色ニ見エケルニ、サリトモ聞シニ違フ人哉、昨日マテ重聞シ大石ノ今俄ニ輕クナル事、何サマ張抜カ、又ハ浅間ノ焼石カト誹謗スル人多カリキ。浩ル所ニ上杉彈正大弼ヨリ〔上杉彈正ハ吉良ノ上野介カ実子也〕大石カ心中ヲ伺ンタメニ京都ニ問者ヲ上テ、蜜ニ彼カ行跡ヲ檢分セラレシニ、内蔵助カ所行案ニ相違ナレハ、上杉方ニモ問者ノ申所ニ安堵シテ、サモソアルラメ、義ハ一旦ニシテ終ニ志ハ遂カタキ物ヲト、其後ハ絶テ用心ノ体モミヘサリケリ。

ここで大石は上杉方の問者を謀るため「酒宴遊興ニ身ヲ委ネ、

親類縁者ニ疎々敷、万法外ニシテ亡君ヲ慕旧恩ヲ思ヒ、忠義ヲ
勵ス志ナトトハ存シヨラサル気色ニ見エケルニ」と描写される
までである。入れあげている遊女の名も出ずその濡れ場の場面
などは具体的に描かれない。あくまで「酒宴遊興ニ身ヲ委ネ」
と記述するばかりである。

これに対し「播磨梶原」中巻「三味に引る、都の風俗」では
「浅野殿の浪人」「小野寺十内」が「大石」を誘い、「祇園」の
「かしわ屋」へ行き、名高い「小まんの君」を「ちよと借ふはと
いひければ、花車はつたりと手を打て、」小まんの全盛ぶりを語
る。そこで二人は小まみを諦め酒を飲みかけると、好かぬ客を
振ったといつて小まんがかしわ屋へ帰つて来た。

物怪調法の内にもかうした大尽さまおふたりあれにましま
すぞ。出てお酌を仕れと花車が手引にうかれ立、三ッ国一
じや酒になりすまいたしやんく。しやんとしたるあいさ
つは聞及びしにいやまさり、かたじけ涙の枝折か明日化野
の露ときへけふりとならば奴次第。いつそ殺せとたはふれ
ておさへさはりの酒の色、赤穂を出て此かたにかゝる楽千
年もよはひをのばす不老不死、又あるべきと思ひきや命也
けり小夜の中枕是なりと、盃替て酔心床をまつ間も有明
の月落鳥の鳴声におどろくにてはなけれども、たのしみ尽

てかなしみとかたり伝ふも世話らしや。又のよるせもあふ
坂の関の小まんは危山がよひ笠を結んで「トおどり、てん
手拍子も揃ふたとうたひぞめひて千鳥足、さらばといふて
帰りけり。此時よりもかよひなれ柏屋かよひしげくなり。
天に舌なし人を以、いはするならひ大石が行跡埒もなく、
今はひたすら色欲におほれ義理外間もわきまへず、主の仇
をも打わすれ破家を尽すと其沙汰浴中にばつとかくれなく
悪に悪を付てそしりあひ、されば赤穂に居りし時、命を的
にかけはしの城を渡さふ渡さじと義者張たるも皆偽よ。忠
義も口にてはいはる、物よ。誠の際になりては金、鉄もか
ならず腐るものをやと世間の口一同に赤穂の腰ぬけ士、風
下にもいやと笑ひあへり。去る程に大石内蔵助良雄漢の韓
信が千人の股をくゞりし術を思ひ、楠が赤坂にて似せ腹切
たる謀をわきまへ、能く興衰の運を考へ表面は不行義の様
子にもてなし、かりに酒食の二ツにたはふれ偽て狂人のご
とくふるまひ、すでにかの小まんを誑出し妾にそなへ置た
る其仕かけ、あ、智略よし雄は人も(28才)知りたる名代
ものをわざとともむる志し家暮の気つかぬ所なり。かゝる
折ふし上杉方より内く用心して大石が義勢を伺はんと思
いひ、間者を四五人のほせてひそかに良雄が行跡を見分

させられしに、内蔵助がふるまひ見ると聞くとは大に違ひ
此ころは茶屋女を抱へ楽遊たぐあそびを専にするゆへ

「上杉方にも安堵して」、「其後は絶て用心くまの体も見へざり
けり。」

祇園の柏屋の小まんという具体的な名を明示して、小まんの全盛ぶりと大石との出合から懇ろとなつての口舌などを描き、廓場の和事を彷彿とさせる。更に身請けにまで至るのだが、実は敵方を油断させるための大石の智略であつたとする。のちの「仮名手本忠臣蔵」(寛延元年初演)七段目でお軽に形象される大石の濡れ場の原初的な出現である。もちろん演劇史をたどれば、「忠臣金短冊」(享保十七年初演)では大石が島原で遊興するし、浮世草子に目を転ずれば「けいせい伝授紙子」(宝永七年刊)では、大石が島原で太夫の高橋にかかる。都の錦は、それらよりはやく宝永四年の時点で赤穂義士伝実録の中で大石の濡れ場を演出していたのである。種本の「武家不断枕」からははなはだしい増幅といえよう。ただしそれが後々まで継承されたのではなく、都の錦の後継作「武道種寝覚」(正徳二年成立か)では、また「武家不断枕」のような記述に戻り、都の錦の決定稿ともいふべき「内侍所」には「武家不断枕」が継承されるのである。また、本章のように都の風俗や大石の濡れ場を描くところが、

「播磨相原」が浮世草子的であるとされる所以である。

都の錦作の赤穂義士伝実録諸作は、現在知られている範囲では、「武家不断枕」(鹿兒島県立図書館所蔵本)が最も古態を示し、それを略したのとして「播磨相原」が生み出され、また「武家不断枕」の系統に戻つて生長した「武道種寝覚」が生まれた。これらは同名の作品でも制作年によつて異同が認められる。現在は所在を確認されていないが、「武家不断枕」三巻には「同増補」四巻・「同大全」五巻・「同評判」五巻・「同綱目」六巻・「同参考」十巻、更に「赤穂評儀伝」二巻などの予告もあつた。このように都の錦はいろいろの試みをしていたといえる。そして更に発展した正徳四年成立の「内侍所」が、作品としての構造性を有し、序・統論などを備える都の錦の決定稿ということになる(前掲・拙著)。

四

この場を借りて、前稿の訂正をしておきたい。拙稿「都の錦」と「播磨相原」新出本」(「大阪春秋」一四五号)において、流刑を赦されて上方に戻つて来た都の錦の手になるものとされていた宝永八年正月刊「新鑑草」(京岡本半七・江戸升屋五郎右衛

門版)の仮名序を、別人のものではないかと推定した。それはこの度新出の『播磨梶原』が薩摩の鹿籠金山において宝永八年三月に著されたものであるからであつた。しかし、若木太一氏より、『新鑑草』の仮名序はやはり都の錦の手になるとご垂教たまわつた。そうすると、宝永七年秋・冬ごろに『新鑑草』の仮名序を上方(京都)で認め、翌八年三月には薩摩の国鹿籠金山を訪問していたということになる。そうだとしても、上方(京都)から薩摩(鹿籠)への移動は時間的には十分可能である。薩摩訪問の理由については、不明としかいえないが、金山で篤く処遇してもらつたことへのお礼参り・表敬訪問のようなものであろうか。

ゆえに、宝永六年ごろ流罪を赦されて京都へもどつた都の錦は宝永七年秋・冬ごろ京岡本半七・江戸升屋五郎右衛門版の『新鑑草』(明和八年正月刊)の仮名序をものし、その後、陸路あるいは海路で、薩摩の国鹿籠金山を再訪し、宝永八年三月に『播磨梶原』を写(著)したのであろう。そして、正徳二年(宝永なら九年に相当する)三月刊の京版『当世智恵鑑』を著作している事実から考えて、都の錦はそう長居もせず、その年の秋・冬ごろまでには上方に戻つたものと思われる。この機会に訂正しておきたい。



新出本『播磨梶原』巻末 (大阪市立中央図書館蔵)

〔注〕

(1) 『播磨梶原』 静嘉堂文庫本の序文による。

(2) 『播磨梶原』の成立年の推定は若木太一氏「都の錦」播磨梶原」をめぐって」(江戸時代文学誌一号・昭和五十五年十二月)による。

(3) 大阪市立中央図書館新収本。新出から寄贈までのいきさつは「大阪春秋」一四五号(平成二十四年一月)に「300年ぶりに自筆本発見―その名は「都の錦」―大阪生まれの元禄浮世草子作者の謎を探る」と題して特集が組まれている。特集の中には拙稿「都の錦」と「播磨梶原」新出本」も所収する。新出本の詳細は同稿、または後掲の解題・翻刻をご覧いただきたい。

(4) 「武家不断枕」は鹿児島県立図書館本が唯一の現存する伝本である。引用は丹羽氏の翻刻による。「播磨梶原」の章題は原則として新出本(大阪市立中央図書館蔵)によるが、関本(枕崎市)にしかない章は、若木太一氏注2前掲稿の翻刻により、(一)を付した。共通度の項で「播磨梶原」諸本は東北大学狩野文庫本を狩と略し、関氏旧蔵枕崎市本は枕とし、静嘉堂文庫本を静とし、新出の大阪市立中央図書館本を大と略記した。

(5) (一)の部分は、新出の大阪市本には見えない。

(6) この「多門伝八郎筆記」の作者を多門に限定しない方がよいのかも知れないが、今は一応多門自身が事件から遙か後に、自己劇化・自己説話化して記述したものとしておく。

(7) 浮世草子風の章題・副題をつけるところもそうである。

(8) 『播磨梶原』狩野文庫本奥書に「報讐記次第」として記されている。

(やまもと たかし／本学教授)